

O-27 人工呼吸器ケアラウンドの実際からみる、 対象者とケアの傾向

前橋赤十字病院 看護部¹⁾ 前橋赤十字病院 臨床工学課²⁾

前橋赤十字病院 理学診療課³⁾

前橋赤十字病院 救急・集中治療部⁴⁾ 前橋赤十字病院 呼吸器内科⁵⁾

南雲 敬子¹⁾ 村田 亜夕美¹⁾ 神尾 芳江²⁾ 田中 真理子³⁾ 荒木 君江²⁾

境野 如美²⁾ 原田 芙美子¹⁾ 中野 実⁴⁾ 堀江 健夫⁵⁾

【はじめに】

呼吸ケアチームによる人工呼吸器ケアラウンド（以下ラウンド）を実施している。その中で、人工呼吸器装着患者のケアは、標準化には至らない現状をみる。今回ラウンドの実際を振り返り、対象者の背景とケアの実際、傾向を知り、患者ケアの標準化に活用することを目的とした。

【方 法】

2006 年 5 月から 2007 年 3 月までの資料から対象者の基本属性、人工呼吸器装着目的、装着日数、転帰、ラウンド時のケアアドバイス内容を調査する。ケアアドバイス内容は看護ケアの他、機器管理、設定までを含む。

【結 果】

対象者は 56 名、のべ人数 168 名、同期間の装着数 3635 名の 22% だった。所属は ICU17%、救命センター 4%、一般病棟 77%。1. 平均年齢は 68.6 歳、70 歳から 80 歳代で 5 割を占めた。2. 男性が 71%。3. 診療科は脳外科 15%、神経内科 14%、整形外科 23%、呼吸器内科 13%、消化器外科 11%。4. 装着目的は呼吸不全 58%、呼吸停止・抑制 30%、その他の 46% は、栄養状態低下、感染、腹部症状悪化等だった。（重複）5. 平均装着日数 56.6 日。6. 呼吸器系既往歴あり 35%。7. 転帰は離脱 49%、死亡 23%、転院 21%。そのうち再装着は 24%。8. ケアアドバイス内容の上位は、体位管理 50%、作動点検漏れ 40%、観察項目 32%、回路管理 37%、気管チューブ管理 31%、ウィニング方法 28%、その他、患者状態に合ったケアの継続、アラーム時の対処方法等だった。

【考 察】

一般病棟はマンパワーが少なく、人工呼吸器に不慣れと予測し、ラウンドを強化したため、割合が多かった。平均装着日数は、離脱を目的とする中で長期と捉えられた。これは対象者の高齢化、脊髄損傷、頭蓋内疾患、重症肺炎などが主要疾患であること、離脱に向けての指標がなく、ウィニングがスムーズでないなどが考えられた。一方、転帰では半数は離脱でき、症例によりケア内容で装着日数の短縮化が図れることが伺える。アドバイス内容は体位管理が 5 割を占め、体位管理の有用性の認識が低いこと、患者の協力が得られない、状態不安定など実践をためらう状況が生じたためと考える。対象の現状を十分にアセスメントできればその時に必要な呼吸ケアがわかり実践につながられるだろう。安全管理では危機管理意識が低い傾向が伺われた。人工呼吸器に対する苦手意識が積極的なケアに関われない状況を作る推察された。

【まとめ】

呼吸不全、呼吸停止・抑制による装着が多く、脳神経疾患、脊髄疾患患者が多かった。装着日数が長期化する傾向があったが、疾患や年齢が装着日数に関与したか明らかでない。対象の半数以上が離脱でき、早期離脱を目標に要因やケア内容の検討が必要である。安全管理が不十分になりがちで、細かなケアが滞る傾向があった。今後ケアの標準化につなげるため環境や施設状況、対象の状況を把握し、進めることが必要である。